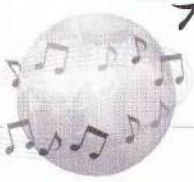
目指せ、世界！海外で活躍する日本人プレイヤー⑲



岸川由起 Yuki Kishikawa

南西ドイツ・フィルハーモニック
副首席ファゴット奏者

連載19
［最終回］

「音楽以外の調和のとれた人間関係から視野が広がり、今まで抑圧してきた自分の意志、感情が湧き出てくるようになりました」

文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

海外で勉強し、就職したらそれがゴールと思われがち。連載最終回は、「ドイツのオケに入団して18年経った今が最高」と語る南西ドイツ・フィルハーモニックの岸川由起さんに、ご登場いただいた。

内気な子供時代を救ってくれたオーケストラ

「ファゴットを始めたのは、まったくの成り行きでした」と岸川さんは語る。

「父が趣味で習っていたクラリネットの先生がジュニア・オーケストラを作ろうとした時、ちょうどファゴット担当の子がいなくて私に話が回って来たのです。ジュニア・オケは、当時消極的でか弱く、学校でも上手くいっていなかった私を救ってくれることになりました。中学3年生の時、このジュニア・オケを通じて太田茂先生に出会い、彼の情熱的な人間性とファゴットの音色に惹かれました。友達ともっと一緒に演奏したいという一心で東京藝大附属高校に入りましたが、プロになることは全く考えていませんでした。

高校2年の時にシュトゥットガルト歌劇場の元首席奏者に出会ったことが縁で、東京藝大卒業後の1994年にシュトゥットガルト音楽大学大学院に留学、1年半後にザールブリュッケン音楽大学大学院に移りました。その頃、バーデン=バーデン・フィルハーモニー管の首席奏者が産休する間だけ契約団員となることができました。そして96年9月に南西ドイツ・フィルハーモニックの第二ファゴット奏者として入団しました」

南西ドイツ・フィルハーモニック

「ドイツには現在130ものオーケストラがありますが、私が知る他のオケと比べて、特別温かくオープンな性格を持っていると思います。団員63人の約半数がドイツ人で、他は23の国籍からなる団員とが混在する国際色豊かなオーケストラです。

1年の公演回数は室内楽や子供のための音楽会も含めると150回ほどです。2200人の会員を持つ定期演奏会はその半分ほどで、その他はゲスト・コンサートなので旅回りがとても多いです。

リハーサルは2時間半のコマを1日2回、2日間続け、3日目がゲネプロと本番になります。日本では1回目の練習から全部通すのが普通だと思いますが、このオケの初稽古のレヴェルはひどいです。縦の線すら揃っておらず、1ページで止まってしまうほどです。皆好き勝手に弾いていて個々がぶつかる感じですが、繰り返すうちにまとまってきて、本番では『そこまでやるか』と思うほどエモーションが出るのがこのオケの面白さです。表現しようという気持ちが皆強いです。日本のオケは旋律を重視する傾向があると思いますが、このオケは和音の変化によって音楽を作ります。全員が一体となって混じり合うと、いい音楽が生まれます。

10年ほど前からは、若い聴衆のための企画にも力を入れるようになってきました。未就学児のためのコンサートが年間8～10回、ファミリー・コンサートが4回、学校巡回コンサートが10回ほどあります。2010年には日本ツアーにも出ました」

オケの中で自分を見つめ直す

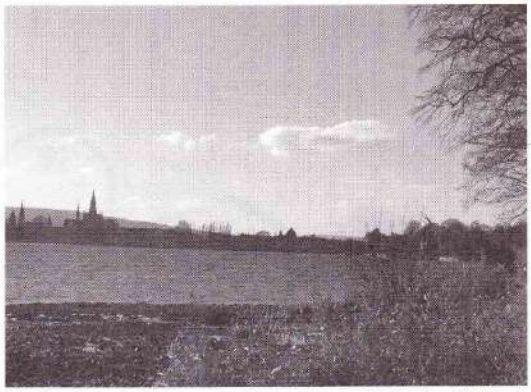
「入団当初は仕事を覚えるのに必死で、技術面にばかり集中していました。弱音や低音のためのリードの作り方から、第二ファゴット奏者としての奏で方、周りとの合わせ方を模索していました。しばらくして、副首席奏者がベルリン・フィルに移ったため、試験を受けて首席のポストを手にしましたが、そこで自分を見つめ直すことになりました。

実は、それまで自分がどう吹きたいかということはあまり考えていませんでした。このオケでは、『(皆と) 合わせる』より、自分のしたいことを出すことが必要なため、自己主張の欠如、音量の問題などの弱点がはっきり見えてきましたが、それとともに豊富なオケ経験という自分の強味も見えてきました。

オケのメンバーと木管五重奏団『ミロワー』として活動し、聴き合うということも覚えました。彼らとは2000年、09年に日本ツアーを行い、CDも出しました」

仕事とプライベートのバランス

「2003年に出産をしましたが、ド



オーケストラの拠点コンスタンツのボーデン湖畔。対岸の大聖堂の先はスイスだ

ミロワー木管五重奏団メンバーと。左からエーリッヒ・ボーン（cl）、岸川さん（fg）、ガブリエル・アユマダ（fl）、アレキサンダー・ハンスマン（ob）、フーベルト・レナー（hr）

南西ドイツ・フィルハーモニックでの練習の休憩中。木管セクションの面々と

イツでは3年間の育児休暇が取れるので夫と交代で働いてみたりもしました。が、私は働いている方が精神的なバランスがよく、以前通り100パーセントのままで働くことにしました。11年まで続けたのですが、アトピー性皮膚炎など体調不良に悩まされるようになって、今は50パーセントで仕事をしています。高校生の時から『100パーセントの音楽生活』をしてきて気付かなかったのですが、このオケのバス移動の多さや、指揮棒に完全に合わせなければならないというプレッシャー、外国で暮らすストレスなど様々な疲れが溜まっていたのだと思います。

今は息子との時間も増え、音楽以外のことにも興味を持つようになりました。合気道をしたり、フリーメーソンなどの研究にも時間を費やし、ドイツで家庭を持ち暮らしながら根無し草のようだったのが、音楽以外の調和のとれた人間関係で地に根を生やすことができました。そこから視野が広がり、既存のお手本のように吹かなければならないという強迫観念からも解放され、今まで抑圧してきた自分の意志、感情が湧き出てくるようになりました。

楽器を操ることで精一杯だった学生時代を経て、オケに入ってしばらくはファゴットを吹くことを心から楽しいとは思えていなかったのですが、今は、気持ちよく吹けて、それによって励まされたり、心を落ち着かせられたりします。これからも、身体に無理なく、自分の言いたいことを言うような自然さでファゴットを操れるようになることが目標です」

吹いている自分も気持ちよいという彼女の言葉通り、ふくよかな温かい音色で人々を癒していくことだろう。

最近のコンサートから。ファジル・サイとベートーヴェン「ピアノ協奏曲第3番」を共演。とても素晴らしかった！

■岸川由起
Yuki Kishikawa

東京藝術大学音楽学部附属高校・同大学を卒業後ドイツに渡り、シュトゥットガルト、ザールブリュッケンの各音楽大学で学ぶ。第1回龍山音楽コンクールで第1位受賞。バーデン=バーデン・フィルハーモニー管首席奏者を経て、1996年、南西ドイツ・フィルハーモニックに入団し、翌年から副首席奏者を務めている。これまでに太田茂、霧生吉秀、伊達博、前田信吉、小山昭雄、M・エンゲルハルト、S・シュヴァイゲルトの各氏に師事。

■南西ドイツ・フィルハーモニック
Southwest German Philharmonic, Constance

1932年コンスタンツ市で創設。その地理的位置からスイス、イタリアとの結びつきが深く、チューリヒ・トーンハレ、ルツェルンKKLホール、ミラノ・サル・ヴェルディで定期演奏会を行うほか、ベルリン・フィルハーモニー、アムステルダム・コンセルトヘボウ等やアテネやトレド等の国際音楽祭へも招かれいずれも絶賛を博し、ドイツ最南部の中心的な芸術機関となっている。ハインツ・ホフマンやトーマス・コンツ、ペトル・アルトリフテル等が歴代首席指揮者を務め、2005年からはミュンヘン出身の気鋭ヴァシリス・クリストプロスが音楽監督を務めている。

■ミロワー木管五重奏団
Miroir Quintett

1996年南西ドイツ・フィルハーモニックのメンバーによって結成。2000年イタリア・アレンツァーノの国際室内楽コンクールで最高点を獲得し優勝。その洗練された音楽性と卓越したテクニックで審査員から「このアンサンブルの完成度を誰も超えることはできないだろう、1人1人の奏者がそれぞれの楽器を知り尽くしている」と絶賛された。以来ヨーロッパ各地で活発な演奏活動を続け、その幅広いレパートリーと完成された演奏で高い評価を得ている。